80 旧市場館 その歴史と建築

旧市場館

大阪証券取引所ビル「旧市場館」は、1935（昭和10）年の落成から今年で80年を迎えます。

1935年4月に竣工した市場館は、2004年に所有者である平和不動産株式会社によりエントランス部分を残し、現在の大阪証券取引所ビルに建て替えられました。
建替えに際しては、その歴史的・文化的重要性を踏まえ、有識者により「大阪証券取引所旧市場館　歴史調査報告書」が作成され、その価値を未来に継承すべく慎重な検討が行われました。
当該報告書において、市場館は「激動する日本経済の最前線に立ち、その基盤として機能を十分果たしてきた。物理的機能にとどまらず、その堂々たる姿は関西経済の経済活動の象徴たりえた。」と評されています。
80周年を記念し、落成までの歴史、設計図及び建替え前の市場館をご紹介します。

引　用:大阪証券取引所（市場館）開発・保存方策検討研究会「大阪証券取引所旧市場館　歴史調査報告書（2004年）」
協　力:京都工芸繊維大学 石田潤一郎教授、株式会社三菱地所設計、株式会社日建設計、東出清彦写真事務所

金融市場の情報発信を北浜から

私どもが1987年に日本初となる株式先物市場を開設して以降、本邦のデリバティブ市場は大きく拡大しました。
大阪証券取引所ビル旧市場館は、大阪を代表する歴史的建造物であるとともに、現在の日本のデリバティブ市場を象徴する建物として、国内のみならず海外からも知られています。
また、1878年（明治11年）の大阪株式取引所開業以降、大阪株式市場は関西の上場会社の成長を促し、日本経済の発展に貢献してきました。その歴史から、大阪取引所は今なお、多くの上場会社に情報発信拠点として活用されています。
我々日本取引所グループは、旧市場館落成80年を機に、旧市場館が日本の金融市場のシンボルとして果たしてきた役割を再認識するとともに、未来に向け、その情報発信機能を発展させていきたいと思います。

2015年8月

株式会社大阪取引所　代表取締役　山道　裕己

先人達の証券市場に込めた思いを未来に

大阪証券取引所ビルは、低層部にアールデコの建築意匠を凝らした旧市場館のシンボル性を一部保存し、昭和初期の貴重な建築物を継承させて、2004年12月に竣工いたしました。
旧市場館が竣工80年を迎えるに当たり、引き続き、大阪証券取引所ビルが金融市場を代表する重要な拠点として利用いただけるよう、証券市場の発展を施設面から支えていく所存です。
今回の展示では、先人達が証券市場に込めた熱い思いを感じていただければと思います。

2015年8月

平和不動産株式会社　代表取締役社長　岩熊　博之

大阪証券取引所旧市場館の沿革（1）

石田潤一郎（京都工芸繊維大学　造形工学科教授）

創立期の大阪株式取引所の施設

大阪証券取引所の前身、大阪株式取引所（以下、「大株」と略すことあり）は、明治11年（1878）8月15日に開業した。その当初の施設は、北浜2丁目11番地の金相場会所を使った。これは、江戸時代に貨幣金・銀・銭の取引市場だったものである。明治元年5月の銀目停止によって閉鎖されたが、土地と建物は、取引にたずさわってきた両替商の共有物として維持されていた。これがそのまま株式取引所となったといわれる。

紆余曲折する市場館建設計画

明治27年から大正2年にいたるまでの過程で、施設の規模は93坪から305坪にまで拡大していた。第一次世界大戦中から戦後にかけての好況によって、株式取引は一層盛んになり、空前の大相場とはやされるにいたった。これに後押しされて、大正8年（1919）、市場施設を根本的に改築する必要があるとの声が強まり、同年12月の定期株主総会において、約300万円の予算で新築を決議した。片岡建築事務所が設計をすすめ、下階を市場にして、上階を仲買人事務所とする計画が立てられたらしい。高層化を図るため、市街地建築物法施行（大正9年12月1日）以前に建築許可を取ろうとしたのだという（同法では高さは100尺で抑えられたが、それ以前の大阪府建築取締条例では道幅の2倍以下、という規定であった）。

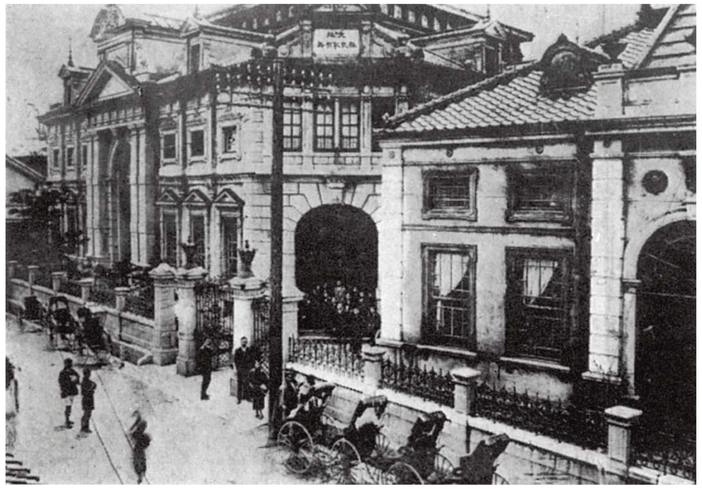
しかし、9年（1920）に入ると、過熱した景気の反動から恐慌を生じ、4月7日から5月9日まで約1カ月間、立会を中止しなければならないほどの事態となった。その後も経済状況は好転しなかったうえ、大正10年には、市場外の取引機関である大阪證券交換所等の企業との合併のため資金の投入が必要となった。こうして、新築の機運に水が差されたところへ、大正12年9月、関東大震災が起き、その1年後の13年9月には大株の資産整理問題が惹起する。これは短期取引の清算機関である株栄会がかかえる巨額の不良債権を大株が肩代わりせざるをえなくなったことなどによって742万円余の欠損が生じたというものである。この補填のために、積立金、繰越金を取り崩すこととなり、市場新築計画は自然消滅してしまう。

昭和2年（1927）3月、渡辺銀行の取り付け騒ぎに端を発した金融恐慌が起こり、市場は大混乱となり、閉鎖を余儀なくされる。しかし、5月に市場を再開したのちは景気は持ち直し、さらに6月に入って、大正14年以来空席になっていた理事長に、弁護士出身で長く理事職を務めてきた上畠益三郎が当選して、気分一新を求める雰囲気が醸成された。

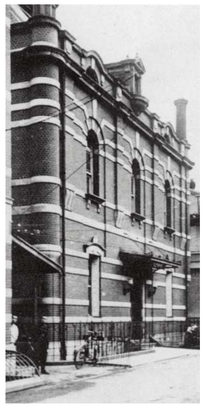
昭和2年12月23日の定期株主総会に新築計画を提出したところ、満場一致の賛成を得、以後、具体案の作成を急ぐこととなった。

80

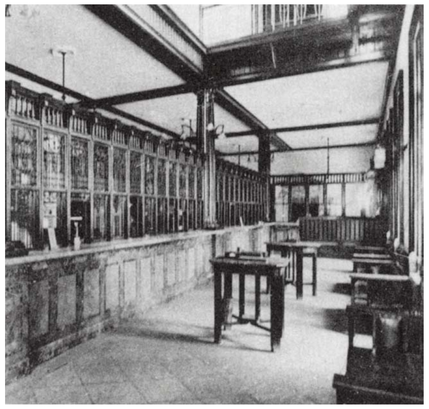
旧市場館



明治32年ごろの大阪株式取引所の土佐堀通り側外観。左手が32年竣工の新市場、右が明治27年に建設された旧市場。



明治44年建設の事務所棟の内北浜通り側外観。



明治44年建設の事務所棟内部。

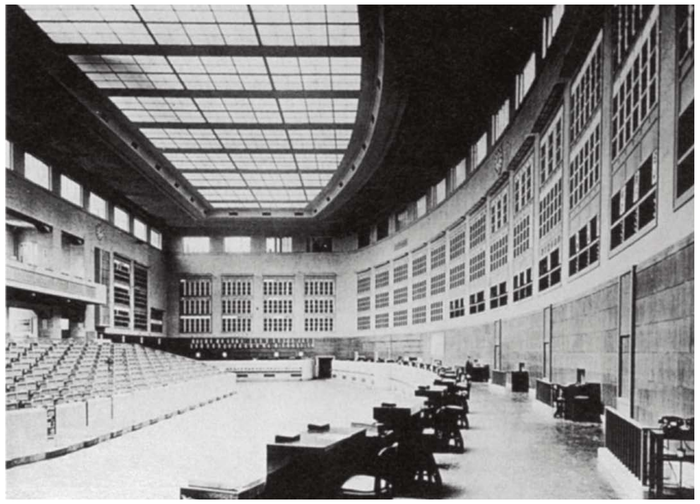
大正2年建設の附属館を北から南を向いて見下ろす。右側の電車通りが堺筋。昭和2年完成の高麗橋野村ビルが見えているから（中央上部）、それ以降の撮影。

左端の複雑な屋根をもつものが明治32年建設、その右が明治27年建設。その右の縦長の建築は未詳だが、デザイン的に見て、大正期の増改築によるもの。その右側の大きな赤レンガ建築が明治44年建設のもの。

大阪証券取引所旧市場館の沿革(2)

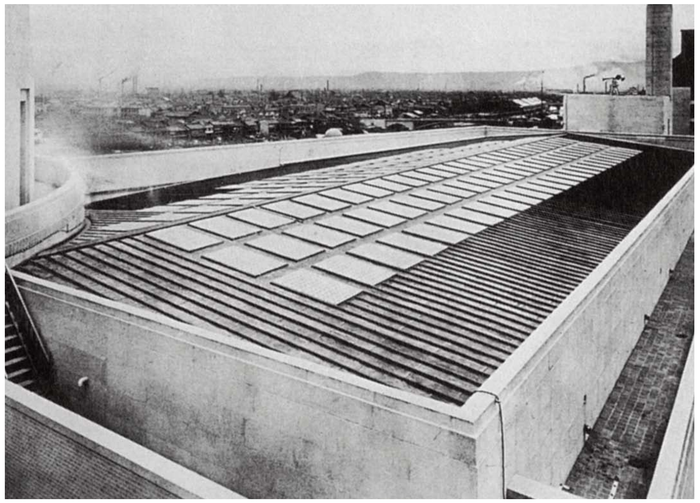
石田潤一郎(京都工芸繊維大学　造形工学科教授)

80
旧市場館



新市場館の立会場内部を奥から入口方向(東から西)に見る。右手が高場、左手が電話席。
高場後方の壁は反射板としてのオークベニヤ板。その上方が株価表示板。

立会場3階外周に設けられた、株価表示板を操作するための通路。



屋上トップライト部分。銅板瓦棒葺とし、窓部分はガラスブロックを並べた。

市場館の設計

市場館設計のとりまとめは竹腰建造が行なった。その下で設計の実際を担当したのは高橋栄治である。室内装飾には笹川慎一も関与している。工作部の筆頭にいる長谷部鋭吉は室内装飾と家具のデザインを受け持った。

設計の進め方は明確でないが、昭和2年の計画で大阪市と係争していた八百屋町筋の廃道は早々にあきらめ、最初から敷地が二分されることを前提としたらしい。前述のように4棟が東西に並んでいたわけだが、八百屋町筋で隔てられた東端の敷地(明治31年建設にかかる市場館がたっていた)に仮市場を設置し、他の3棟を除却して新市場館の敷地とした。

東西に長い敷地形状と、堺筋が主要道路となっていることから、東寄りに立会場を置き、西端に玄関を開くという骨格はほとんど自動的に決まったであろう。また、「相場が青天井に騰がる」という縁起かつぎから、立会場の上階には部屋を置かないことが求められていた。エントランスホールを円形とする構想も早くから決定していたとみられる。これは、同様に細長い敷地にたつ東京株式取引所の手法が念頭にあったのかもしれない。また、外装材は、竹腰建造は当初、人造石で考えていたが、ロンドンの株式取引所にならいたいという大株側の希望があり、全壁面を北木島産の花崗岩で包むこととなった。その面積は10万平方尺という。

株式取引所にとって機能上の中心となるのは立会場である。設計の重点も立会場に置かれた。立会場は、市場代表者(いわゆる場立ち)がいるほかに、電話席(仲買人が店と連絡を取り合うブースが並ぶ一角)、高場(売買取引を進行させる取引所の職員が位置を占める一段高い場所。撃拆(げきたく)係〈値段の決定を合図する拍子木を打つ〉、記録係、計算係などが配置される)が配される。そして壁面には株価が表示される。大株の場合、短期、長期、実物、国債の4取引が行なわれ、高場、相場表示もそれぞれ4区画に分かれていた。取引所側の意向を聞くうちに、立会場の規模は、当初考えていた面積よりも拡大し、その結果、玄関ホールの平面形状が当初の真円から奥行きの浅い楕円形に変わった。

大株の立会場設計でもっとも考慮を要した点は三つあった。

一つは、電話席から相場表示版がよく見えること。従来の大株の立会場は平らな壁面に株価を表示したため、端からでは角度がついて見えないことがあった。また先行する東京株式取引市場館では、立会場の中央に電話席を置いたので、左右両側の壁面に同じ表示を出すという手間を強いられた。こうした欠点を解消するために、大株では、昭和7年に設けた臨時の立会場でいろいろな実験を行い、最終的に壁面を湾曲させることになった。

二つ目は立会場の中を明るくすること。ここでは天井の過半をトップライトとし、さらに4階部分の側壁全周に高窓を配して採光している。

三つめは2千人を超える場立ちの喧噪が反響するのを抑え、一方で、高場からの撃拆は場内に響き渡るようにすること。この二律背反を達成するために、内壁には高粱(コーリャン)殻を塗って吸音性を高めつつ、高場の背後の壁だけオークベニヤ張りとして反射性を持たせた。立会場の天井が52尺ときわめて高く、しかもガラス張りなので、残響があるのではないかと設計者も一抹の不安があったが、計算どおりの結果を収めた。

このほか、立会場では前例のない工夫が多く見られた。たとえば、電話席を502席と広く取った。3階の分とあわせて541席あり、従来の2倍半に及んだ。また、株価の表示を従来の漆塗りの板に胡粉で手書きという方式をやめて、長期取引は押しボタン式、短期は数字を書いた板を枠の中にはめ込む方式を採用した。あるいは、やや笑い話に属するが、市場開始を知らせるサイレンの音程が鳴り終わりに低くなるのを嫌い、一瞬で音が止まる装置を作っている。

こうした性能の充足ということの意味について、竹腰建造は次のように述べている。

> 市場内には毎日数千の頗る鋭敏なる感覚と頭脳を有する取引員又は其代理人があって、非常なる緊張裡に市場を使用されるのであるから建築使用上の些細の不便に対しても少しの容赦もされないのであるから殆ど市場の実用上の価値のみが、建築全体の価値と建築の意義とを支配するものと云ふことが出来るのであって、数百万の工費も、輪奐の美も実用上の価値の前には何等の価値もないのである。此点に関しては、此建築を見る一般の建築家又は市場関係外の者には、市場当事者又は我々其の建築の衝に当たったものと、この建築に対する観点又は心持ちが少し異なっていることと思ふ。

立会場についてこう考えていた竹腰は、昭和10年4月26日に竣工直前の仮立会が行われるにあたって、上記の工夫が期待通りの効果を持つか、気が気でなかったという。「この日の前晩と、その日の午前程私は心配したことはなかったのであります」という彼の言葉はまさに本音であろう。

施工は大林組で、昭和8年4月18日に地鎮祭を行ない、5月23日に工事が開始された。

この建築は、敷地が台形をなすうえに、各種の曲線が多用されたため、部材の寸法とその交差角度がきわめて複雑なものとなった。立会場の上には鉄骨トラスが架けわたされていたが、土佐堀通りがわの壁が曲面となるので、そのスパンはそれぞれ異なることとなった。この寸法を確定するためには、その曲率半径約72メートルの大円弧を原寸で描かねばならない。広い空き地を探しまわり、結局桜ノ宮公園を使って実測を行ない、鉄骨の原寸図を作成した。なお、鉄骨の製造は桜島の大阪鉄工所が行った。同9年9月21日の室戸台風では外装の石材が冠水汚損する事態となったが、何とか洗い落とすことができた。

昭和10年(1935)4月28日、大阪株式取引所市場館は、2年の工期を経て竣工を迎えた。この日から3日間、盛大な落成式が開かれ、翌5月1日に初立会が挙行された。工事中、事故死者を一人も出さなかったのは、当時としては快挙であった。ただ、濱崎理事長が昭和9年10月29日に在任のまま死去し、竣工を見届けることができなかった。なお後任の理事長は副島千八である。

なお、仮市場があった八百屋町筋以東の敷地には、10年8月から事務所を収めた附属館(のち本館)が建設され、こちらは12年5月に竣工した。

4階貴賓室。床は写真では寄木貼の状態だが、
すぐに絨毯が敷かれた。右手の絵は横山大観作。

大阪証券取引所旧市場館の沿革(3)

石田潤一郎(京都工芸繊維大学　造形工学科教授)

80
旧市場館

旧市場館の概要

建物の平面は東西に長い台形状の輪郭をなし、西側の堺筋・土佐堀通交差点に面して主玄関を開き、楕円形平面のエントランスホールを置く。エントランスホールは3層分吹き抜けており、4、5階は貴賓席と会議室、6階は集会室とする。ホールから東側は立会場が大半を占め、外周に沿って小室を配置する。

構造は鉄骨鉄筋コンクリートであった。

立面は、主玄関まわりに4層分立ち上がる角柱の柱型6個を並べる。その他の壁面は、抱き(壁面からの奥行き)の大きい長方形の窓を整然と並べる。外壁はすべて、花崗岩が張られる。

内部について。西端にエントランスホールを置く。この室は、楕円形(長径16470ミリ、短径8370ミリ)をなす。3層吹き抜けで、平面の楕円短径より天井高が高い(約11400ミリ)。

内壁は、磨き仕上げの大理石を平滑に張り、1、2階境に茶色の石でストリング・コースを細くめぐらすほかは全く凸凹がない。なお、この石はイタリア産で、竣工当時、銀茶色と形容された独特の色合いとつややかな光沢を有する。内壁一周分が一つの石から取れたため、縞がつながるところがミソである。1平方メートルあたり27円の高額と伝える。床面には分銅を象ったといわれる円と星形を組み合わせた文様が描き出され、また窓のフロストガラスに花瓶と花の模様が刻まれる。

エントランスホールから、立会場・判取場・エレベーターホールへは3本の短い通路を抜けて進むことになるが、その側壁面には半円形にくぼむニッチを設け、結界としての演出を図る。なお、判取場とは、成立した取引を所員と取引人とで照合確認する場所で、立会場の外周廊下に設けられた。

立会場は、1階から4階分を吹き抜いて天井高は約15メートルに及ぶ。前述のように、天井面の過半はトップライトとし、北側に巨大な曲面壁を置いて相場表示板を設け、南側に電話席を配する。装飾性を排除した意匠で、柱型の垂直線と梁・小壁の水平線だけが等間隔に壁面を分割する。白を基調として、直線と円弧面という幾何学性が強調される。

このほか、エレベーターホールは琉球産の多孔質大理石を張り、エレベーターの扉にはフィレンツェの聖ジョヴァンニ洗礼堂の扉を想起させる四つ葉のクローバー文様、および星形の装飾が施される。材質は扉本体がホワイトブロンズ、装飾部分がアートブロンズである。

上階では、4階南西角に貴賓室、同じく4階のエントランスホールの上方に当たる位置に会議室、6階に大集会室が設けられた。貴賓室は「満洲」産クルミベニヤを平滑に貼り回し、重厚ななかにモダニズム的な単純志向が伺える。ベニヤの木目が対角線方向に走り、菱形が連続するような模様が壁面に描かれるが、これは当時「アンテナ型」と呼ばれた。この室のドア上部の欄間やカーテンボックスの金属グリルにはアール・デコの影響が現われる。4階会議室はエントランスの真上に置かれた室で、扇形をなす。エントランスホールのシャンデリアを小振りにしたキノコ型の照明が使われていた。天井に設けられたエアコンの吹き出し口には、機械の部品を組み合わせたような装飾が施される。6階大集会室は扇形と楕円を組み合わせた複雑な室の形状をしており、「打ち出の小槌」と評された。壁面の仕様は4階貴賓室と同様のベニヤ貼りだが、市松模様ふうに濃淡をつけ、また象嵌によって横縞を描く。天井には、平面形状と対応する楕円形の梁型が配された。

敷地面積は1225.6坪、建築面積1022.6坪、延面積3924.2坪で、市場部分の床面積は691.8坪である。高さは正面シリンダー部分上端までが102尺である。建設費は266万5000円と伝え、直接建築に関わる金額は180万円という。

一方、附属館は、地上7階、地下1階、建築面積228坪、延床面積1759坪の規模である。使用した主要な材料の量は、鉄骨2275トン、鉄筋1832トン、セメント50キログラム袋13万3400袋で、使用延べ人員は16万7000人であった。

工事概要に従って、各室の当初内装材を記す。

◎正面大玄関　壁:外国産大理石、天井:プラスター塗、床:模様入り大理石敷

◎立会場　壁・天井:高粱殻塗、腰:上部ベニヤ板張り、同下部大理石張、床:桜材ブロック敷

◎高場及び電話席　腰壁:大理石、電話席:鋼鉄製

◎判取場　腰:琉球産大理石張、壁:キルクペンキ塗、床:花崗石敷

◎貴賓席及び大集会場　壁:ベニヤ板張り、床:寄木張、天井:プラスターペンキ塗

◎会議室　壁:布張ペンキ塗り、天井:プラスターペンキ塗、床:リノタイル敷

◎その他各室　壁・天井:プラスター塗、腰:ペンキ塗、床:リノリューム敷

◎廊下　壁・天井:プラスター塗、腰:ペンキ塗、床:人造石研出

◎各玄関　壁:琉球産大理石張、天井:プラスター塗、床:花崗石敷

◎階段　腰:擬石塗、壁・天井:プラスター塗、床:モザイクタイル敷

◎その他　窓:スチールサッシュ、一部スチールシャッター、要所ホワイトブロンズ扉入

最後に、完成後の推移について触れたい。戦時下にはいって、昭和18年6月には、大株は国策によって特殊法人の日本証券取引所大阪支所とされる。大阪大空襲では焼夷弾が立会場天井裏に落ちたが、大きな被害とはならずにすんだ。しかし、金属回収令によって、窓グリルや出入り口鉄扉等が撤去された。

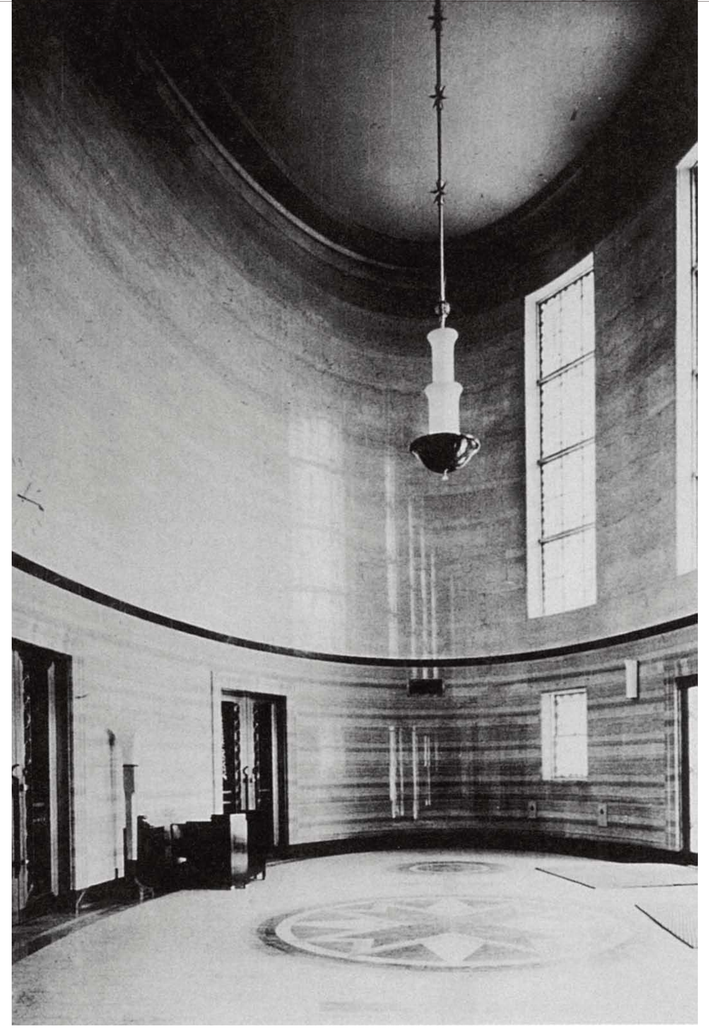
20年8月10日にソ連軍の参戦の報を受けて立会停止となり、以後、市場館は閉鎖される。本館は進駐軍に接収されて、米軍第25師団管轄下の陸軍病院となった。一方、日本証券取引所は昭和22年4月に解散し、同年7月に、日本証券取引所の所有していた土地・建物・設備を引き継ぎ、新しい証券取引所の利用に供するための組織として、平和不動産株式会社が設立された。昭和24年4月に会員組織による大阪証券取引所が開設され、同年5月16日、ようやく市場館での立会が再開される。

昭和39年4月に市営地下鉄および京阪電鉄との地下通路を設置、41年12月には市場館と本館のあいだに高架連絡通路を設けた。44年3月にはトップライトを従来のガラスブロックから網入りガラスに改造した。さらに、昭和49年9月20日をもって、株価の表示システムが変わり、それまでの札掛け方式は終わり、24日からは電気表示となった。あわせて高場も解体した。

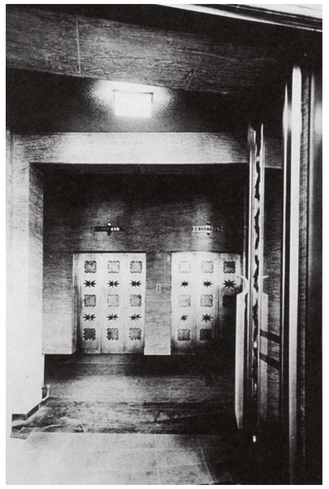
昭和62年には立会場天井、壁、照明を改修した。同時に4階貴賓室、同会議室、6階大集会室も改修を行なった。

平成3年(1991)2月、コンピュータによる株式現物取引のシステム売買が開始される。この時点では立会場銘柄150銘柄が残ったが、平成11年7月に完全にコンピュータ化されて、立会場は廃止される。

平成12年(2000)3月をもって市場館は閉鎖された。13年10月に解体がはじまり、14年5月には、保存される部分を除いて、すべて撤去された。



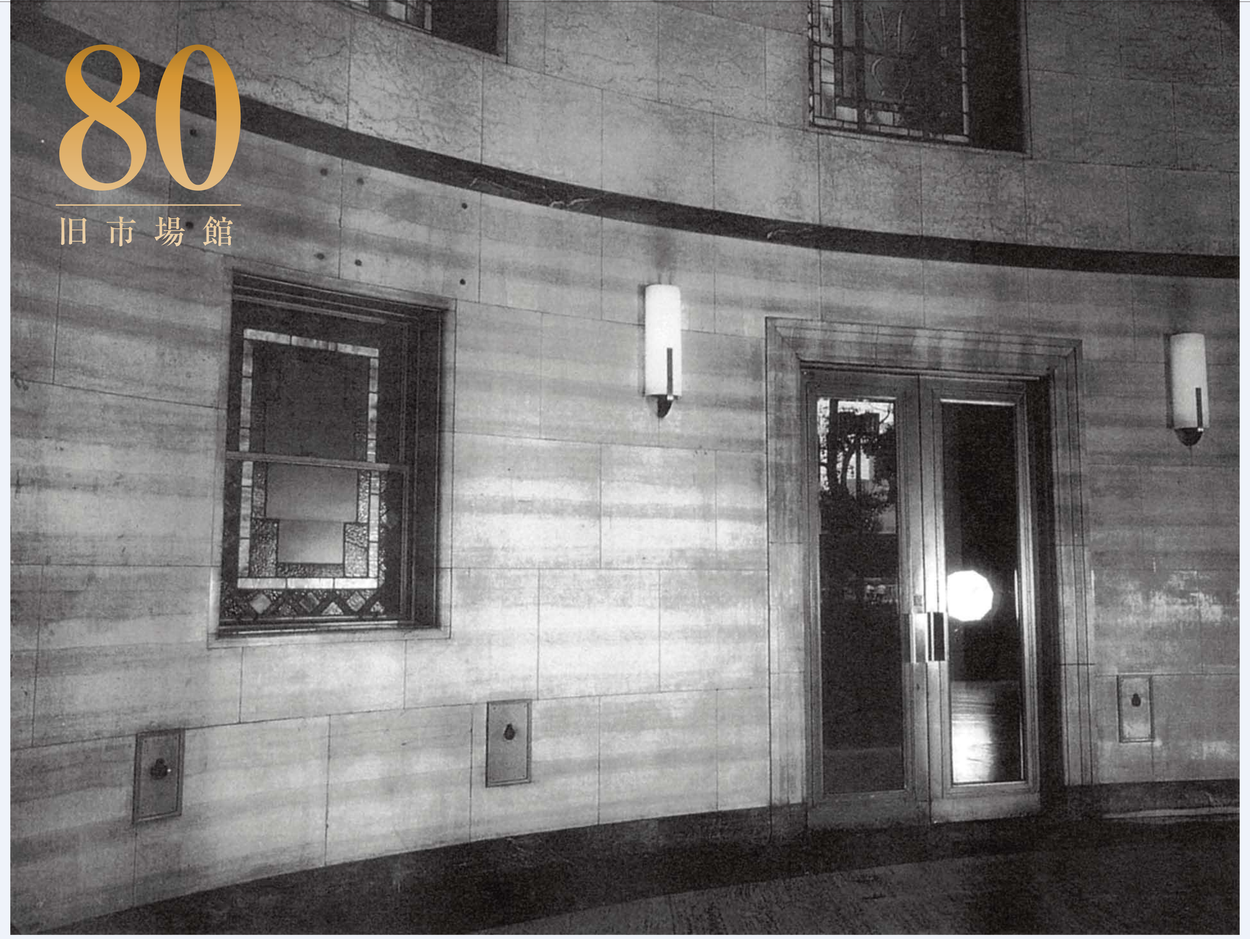
エントランスホール。シャンデリアや奥との境にある扉は戦時中に失なわれた。この楕円形をはじめとして複雑な曲線が多く、製図・施工は困難を極めたと担当した高橋栄治は述懐している。



エントランスホールの写真に写っている
左手のドアを開けて奥のエレベーターホールを
見たところ。
この通路の左側壁は半円形にくぼまされている。

参考文献

『大阪株式取引所沿革及統計書』(明治36年)
『大株五十年史』(昭和3年)
『大阪証券取引所十年史』(昭和39年)
「巻末附図　大阪株式取引所新市場」
(『建築雑誌』昭和10年10月)
「大阪株式取引所」(『建築と社会』　昭和10年6月)
「"大阪株式取引所"の建築を語る」(同上)
「大阪株式取引所」(『新建築』昭和10年9月)
「大阪証券ビル建設物語」
(『大阪証券取引所社内報』昭和45年)
「わが街大阪　歴史を語るビル11　大阪証券ビル市場館」
(『大阪ビルディングニュース』平成元年11月)
『近代建築画譜』(同刊行会、昭和11年)
竹腰健造『幽泉自叙』(創元社、昭和55年)
大阪証券取引編『北浜』(昭和53年)
中村光行『北浜100年』
(ニュージャパンプレス、昭和53年)
松永定一『北浜盛衰記』
(東洋経済新報社、昭和34年)
投資日報社『今は昔　相場物語』
(投資日報社、昭和47年)
人事興信所『第8版　人事興信録』(丸善、昭和3年)
『大正人名事典Ⅲ』下巻
(日本図書センター、平成6年(底本昭和5年))



1階エントランスホール。扉の意匠はオリジナルなものではなくなったが、大理石は当時のままのものである。はじめはこのままの状態で保存することを検討したが、下地の状態をチェックした結果、いったん仕上げ材をはずし、新しい下地の上に復元する事となった。
楕円形のプランとなっていることと、手仕事による曲面加工の為、厳密には同じ寸法の石材は全くない。

大阪証券取引所旧市場館の仕上げ工事について(1)

西堀正樹(三菱地所設計　建築設計部主幹)

ホール部床・壁　大理石

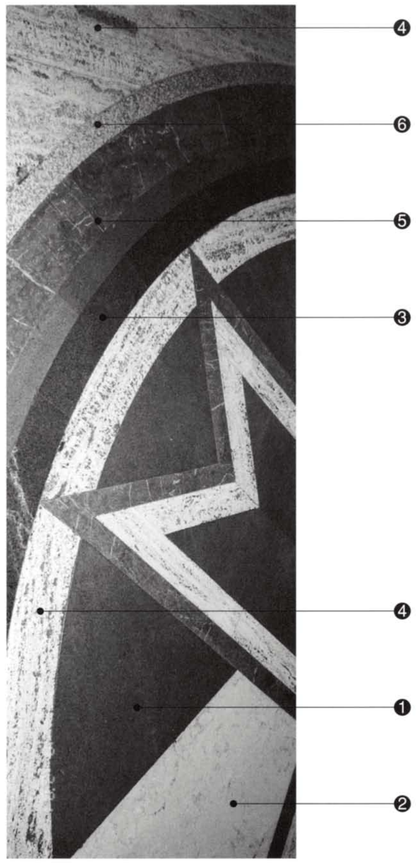
石種・・・エントランスホール内部には、床・壁で合計8種類の大理石、花崗石が用いられている。

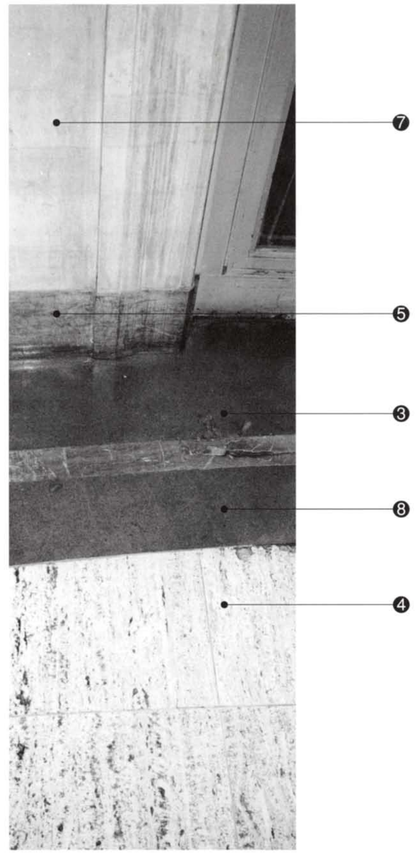
写真上の番号	石種／産地
❶	折壁／日本(岩手)
❷	ボテチーノ　クラシコ／イタリア
❸	浮金／日本(福島)
❹	トラベルチーノ　ロマーノ／イタリア

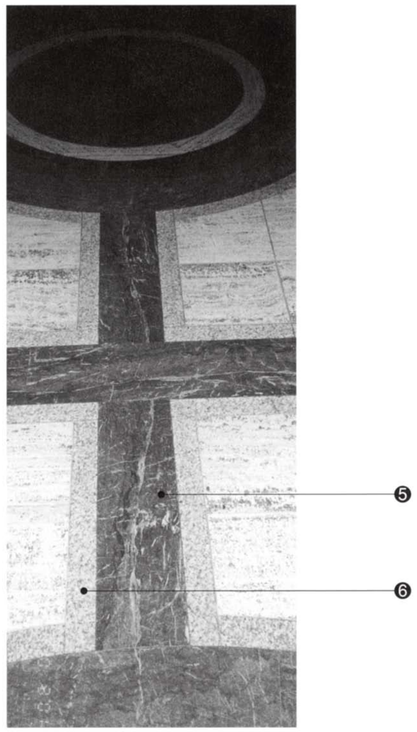
写真上の番号	石種／産地
❺	桑尾／日本(高知)
❻	稲田／日本(茨城)
❼	フィレットロッソ クラシコ／イタリア
❽	松葉／日本(山口)?

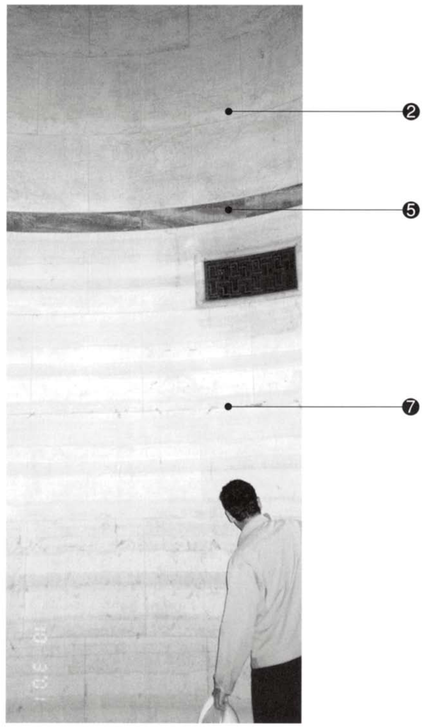
石種の特定は、当時施工を担当した矢橋大理石㈱にて確認した。8番の石種については、確定はできなかった。

エントランスホールの石種









ステンドグラス詳細。鉛の固定方法は点ハンダ方式で、当時としては珍しかった。鉛の見込み巾は3ミリで、色ガラスは全てこの巾に納まっている。

大阪証券取引所旧市場館の仕上げ工事について(2)

西堀正樹(三菱地所設計　建築設計部主幹)

ステンドグラス

このステンドグラスは、エッチンググラスと色ガラスを併用した、当時としては珍しいものである。中心部分のエッチンググラスについては、大阪エッチンググラス社(創業者生田徳治)によるものであることが分かっている。旧朝香宮邸や大阪そごう百貨店入り口(前述生田徳治作)及び別館に使用されているデザインと類似している、グレードの高い作品である。

色ガラスは、アメリカのココモ社とフランスのサンゴバン社のものが使われている。しかしながら、これらをアッセンブルした会社は不明である。当時関西では、関西ステンドグラス社というのが存在していたが、その会社の製作かどうかは、不明である。

デザインは、花瓶と植物をモチーフとした、アールデコ様式といえるものである。今日では、ステンドグラス作家が、与えられたテーマを元に図案を考え出すが、当時の職人のレベルを考慮すると、建築家側から、何らかのオリジナルな柄が与えられ、それを元に、職人が製作したものと考えられる。

技術的な特徴としては、鉛の固定方法として、部分ハンダ(点ハンダ)しかされていないという点がある。きめの細かい全ハンダが日本の伝統であり、点ハンダは海外で採用されている技術である。しかしながら、これをもって、このステンドグラス作者への海外からの影響を述べるほどの証拠とは言い難い。

色ガラスが厚さ3ミリなので、固定する鉛の見込み幅も3ミリがベースとなっている。ところが、エッチンググラスは、厚さ5ミリであり、取り付けに際し、ガラスの両面にサンドブラストにより溝を切り、ガラスの厚みを3ミリにして取り付けている点も、模様を深く彫るための工夫であり、珍しい技術である。

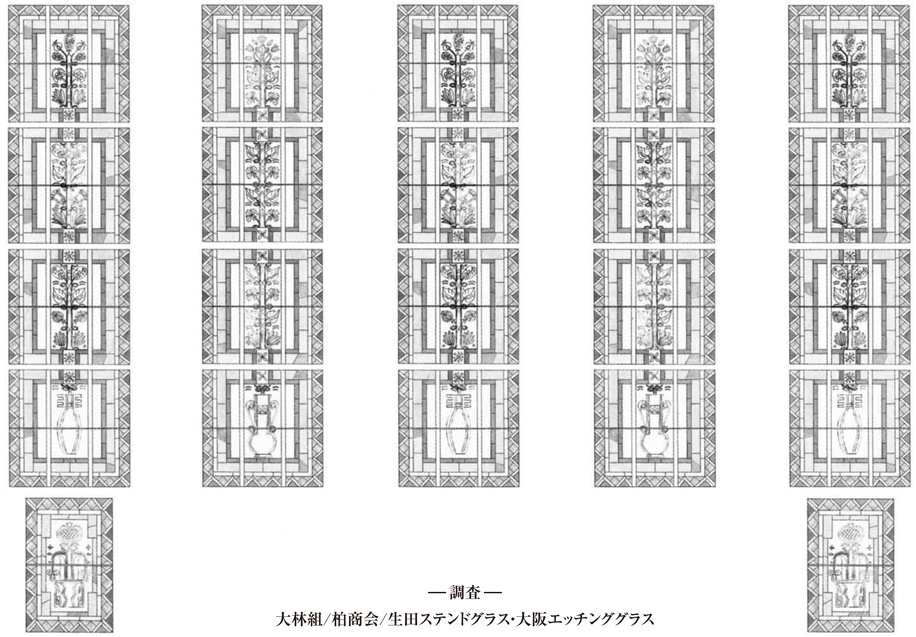
昭和10年頃に製作されたものでありながら、年代の割に、鉛の状況は良い。

特に外部に雨対策のフロートガラスを入れていないわりに、600ミリ以上内部に入った箇所に窓が取り付けられ、上部が「軒」になっているために、良好な状態が保てたといえる。しかしながら、特に開閉窓にとりついているガラス部分に割れが発生している。

再現は可能である。1階内部から見て左側のエッチンググラスは、別のものと変わっている。

また、窓枠の再塗装の際に、ペンキが付着している箇所もあり、薬品による除去が必要である。

エッチンググラス詳細。厚さ5ミリのガラスを用いている。固定する鉛の溝巾に合わせるため、周囲を3ミリ厚に削っている。

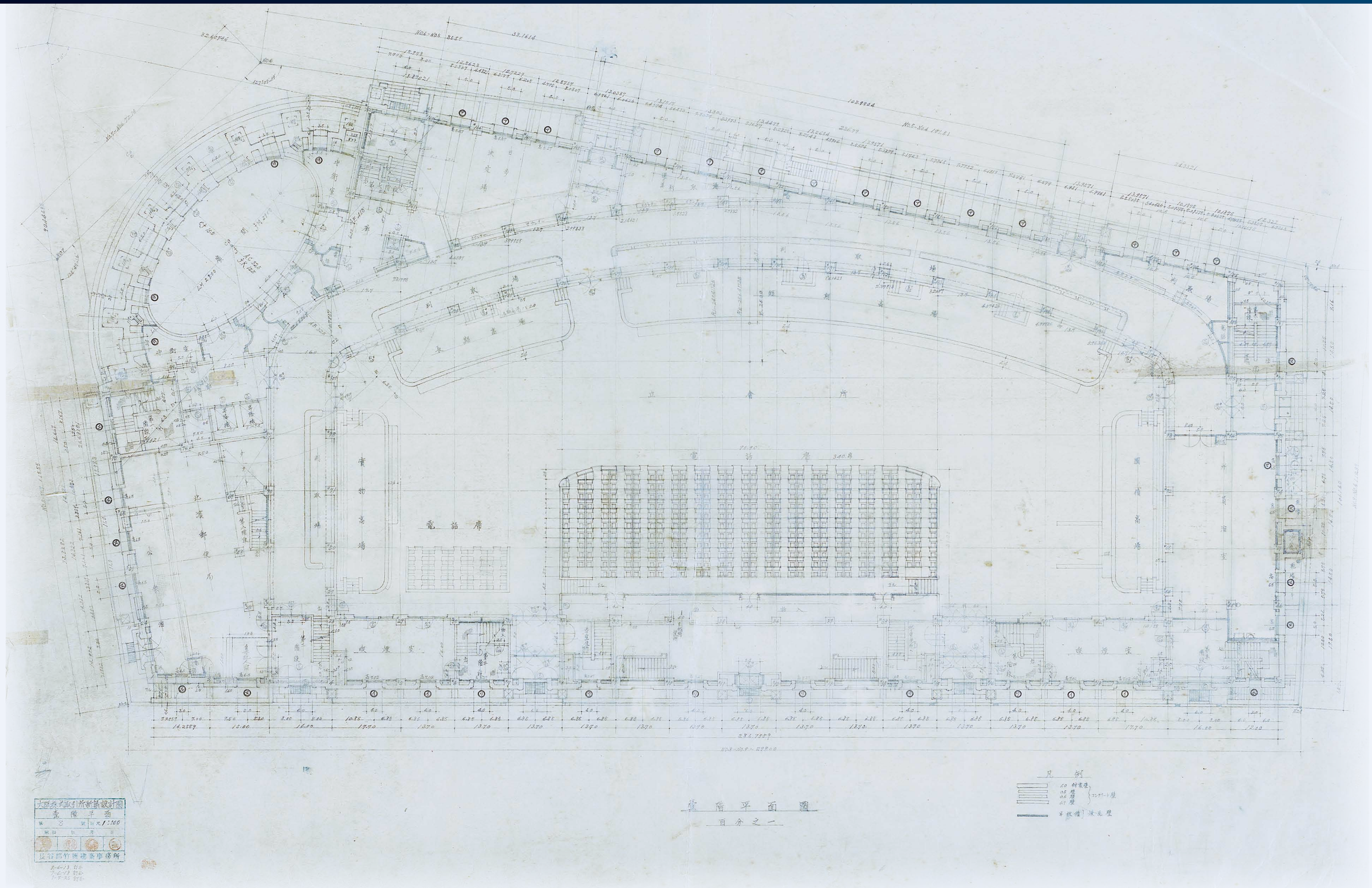


— 調査 —
大林組/柏商会/生田ステンドグラス・大阪エッチンググラス

ステンドグラス全体図。デザインは花瓶と植物をモチーフとした、アールデコ様式である。全体的に保存状態はよいが、開閉機構のついた窓部分のエッチンググラスは一部割れている。今回は、これらをオリジナルの状態に戻すべく、復元する計画となっている。

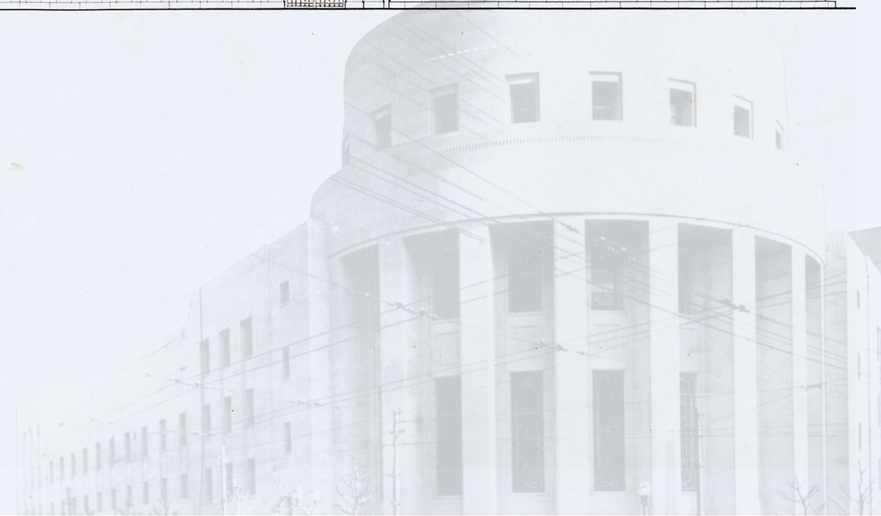
旧市場館 立会場設計図

取引所にとって中心となる立会場は、最も設計の重点を置かれ、市場代表者（場立ち）のスペースのほか、場電席（仲買人が場電店と直接連絡を取り合うブース）、高場（取引を進行させる取引所職員）が配されました。そして壁面には株価が表示され、場電席から相場表示板がよく見えるように壁面を湾曲させる設計となりました。立会場の規模は、考えられていた面積よりも拡大し、その結果、玄関ホールの平面形状が当初の真円から奥行きの浅い楕円形に変わったというエピソードもありました。



旧市場館 北面姿図

東西に長い台形状の土地に、堺筋・土佐堀通交差点に面した主玄関、楕円形平面のエントランスホールがあります。
主玄関まわりに、地上4階分立ち上がる角柱の柱型6個を並べ、その他の壁面は、奥行きの大きい長方形の窓が整然と並んでいました。
外壁はすべて花崗石が張られていました。

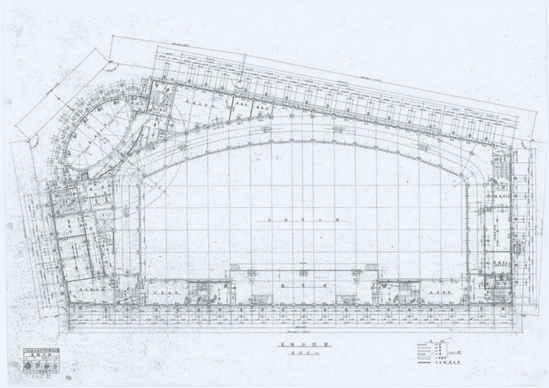


提供:株式会社日建設計

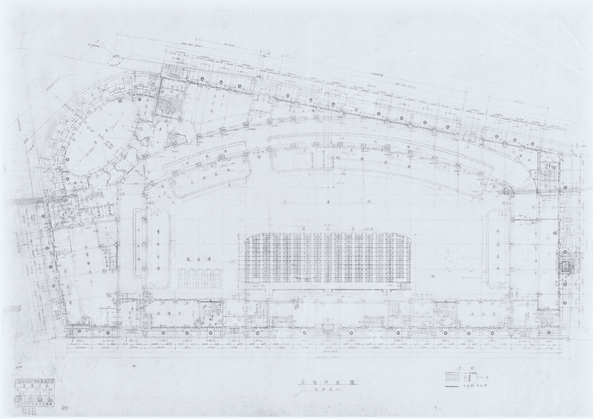
旧市場館 正面断面図・各階設計図

エントランスホール部分は地上3階分吹き抜けており、4、5階は貴賓室と会議室、6階は集会室となっていました。
また、旧市場館の大半を占める東側の立会場部分は、「相場が青天井に騰がる」という縁起担ぎから、
立会場の上階には部屋はなく、外周に沿って地上4階まで小室を配置していました。

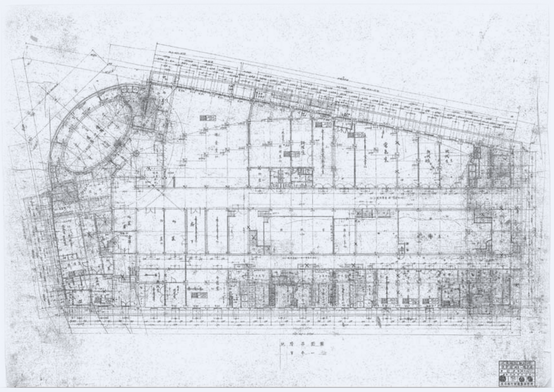
二階



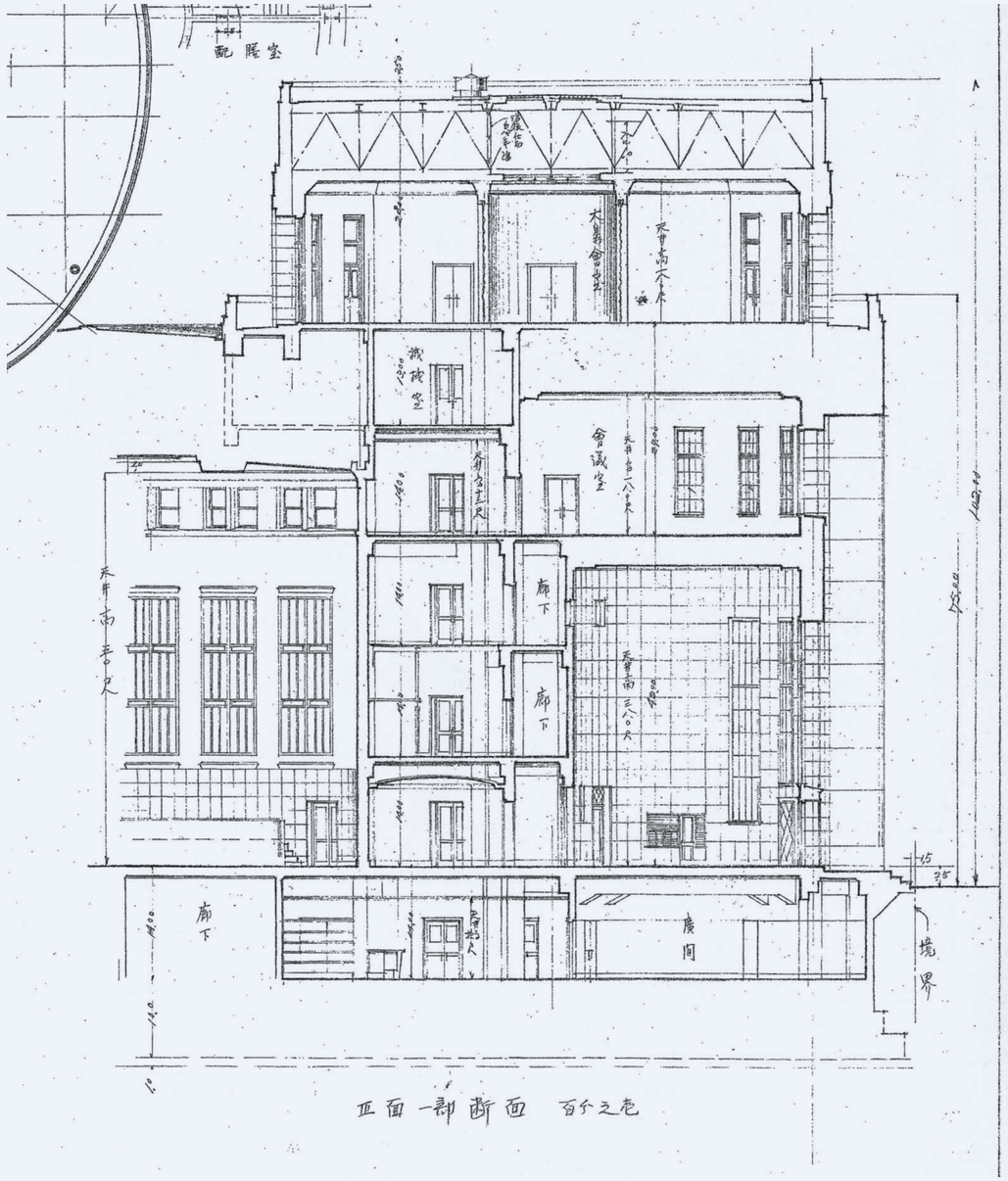
一階



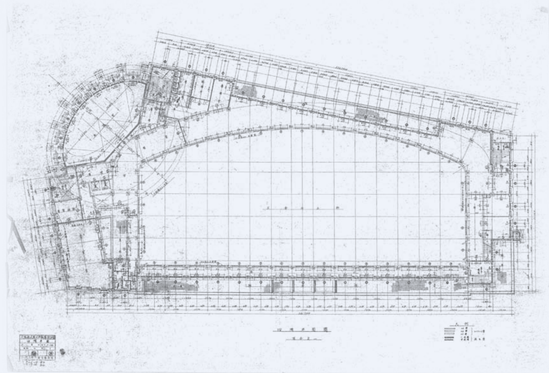
地下一階



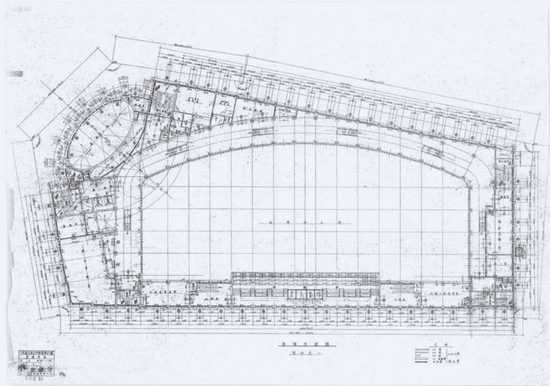
旧市場館（エントランス部分）正面断面



四階



三階



立会場

1990年（平成2年）頃はまだ場立ちの人々がいる。
竣工以来の歳月の経過で、設備や内装、トップライトの形状は変わったが、櫛形の空間の骨格は変わらない、。

提供:東出清彦事務所

正面全景

北西から見上げる。右の街路が堺筋、左が土佐堀通りで、旧市場館がこの二本の街路の交差点にそびえていたことがよくわかる。
円筒部分の列柱がかたちづくる彫りの深いファサードは、この建築の記念碑性をよく示す。植込は戦後に設置されたもの。

提供:東出清彦事務所

正面全景

西から見る。左隅から斜め上方に伸びる街路が土佐堀通り。この両側の地域が北浜である。
「百万両見たけりゃ北浜においで」と唄われた証券取引の中心地。手前の道路は堺筋。

80
旧市場館

提供:東出清彦事務所

エントランスホール

エントランスホールを長軸方向から見る。中央の文様は分銅秤を象ったもの。
フロストガラスとステンドグラスは奇跡的にもほとんどがオリジナルのままである。

ステンドグラス

玄関右側に開く窓。角を丸め、いかにも柔らかく仕上げた壁体の表現が、
窓ガラスに描かれた花瓶の甘やかな絵柄と、的確に対応する。

提供:東出清彦事務所

エレベーター・ホール

エレベーターの扉に刻まれる菱形と4個の半円を組み合わせたモチーフはフィレンツェのサンジョヴァンニ洗礼堂の南扉に施された文様に由来する。ホワイトブロンズの地にアートブロンズによって描き出される。

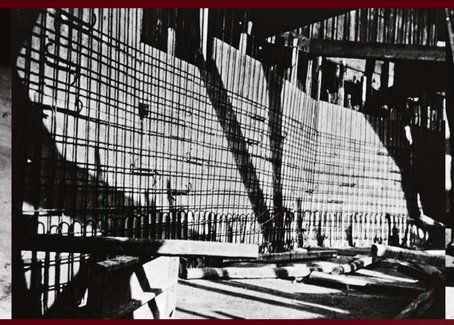
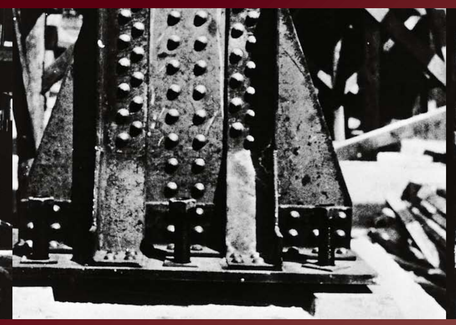
提供:東出清彦事務所

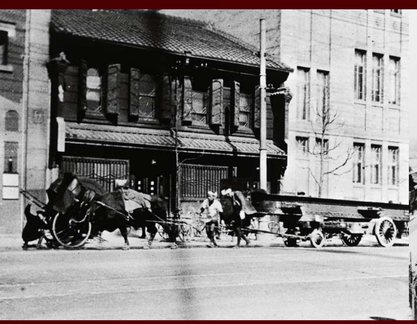
ステンドグラス

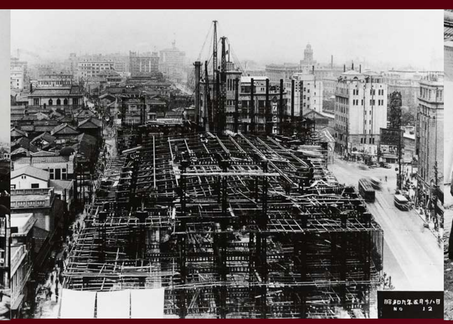
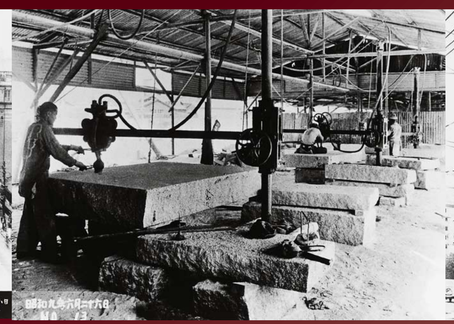
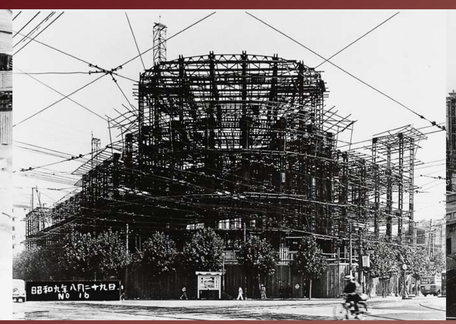
エントランスホールの楕円を短辺方向から見渡す。正面玄関のガラスの向こうに北浜の町がある。
フロストガラスの文様が微妙にバリエーションを付けられている。左側下部の窓だけがオリジナルのガラスを失った。

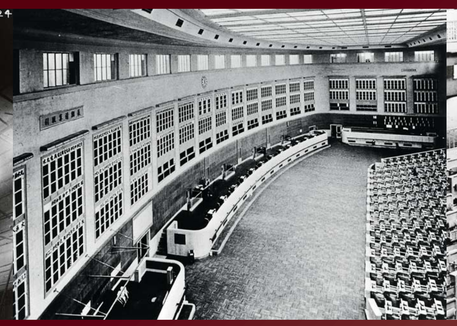
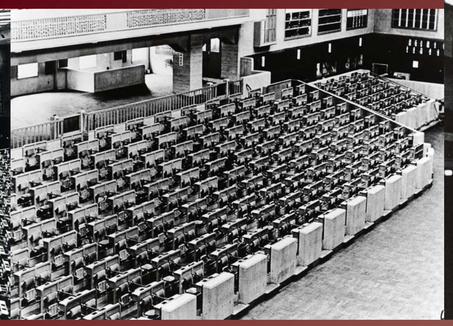
提供:東出清彦事務所

旧市場館建設の様子（昭和8年～10年）



大阪取引所 所蔵

創刊十五周年記念

大大阪區勢地圖

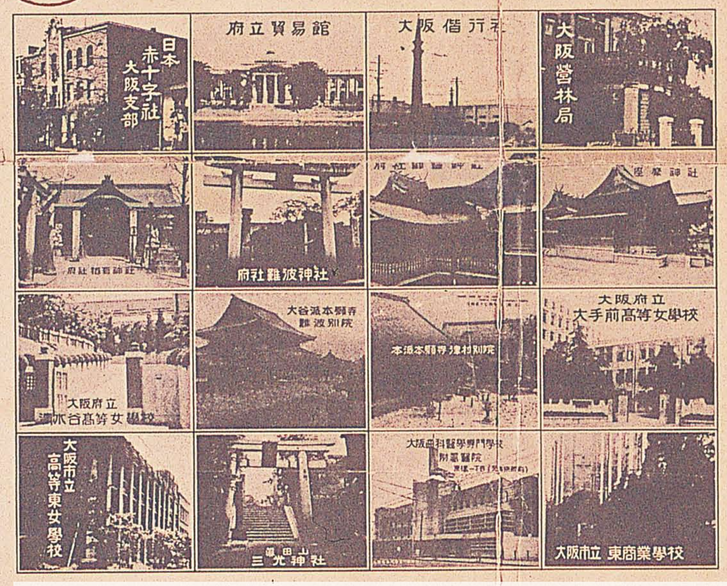
夕刊大阪新聞附錄

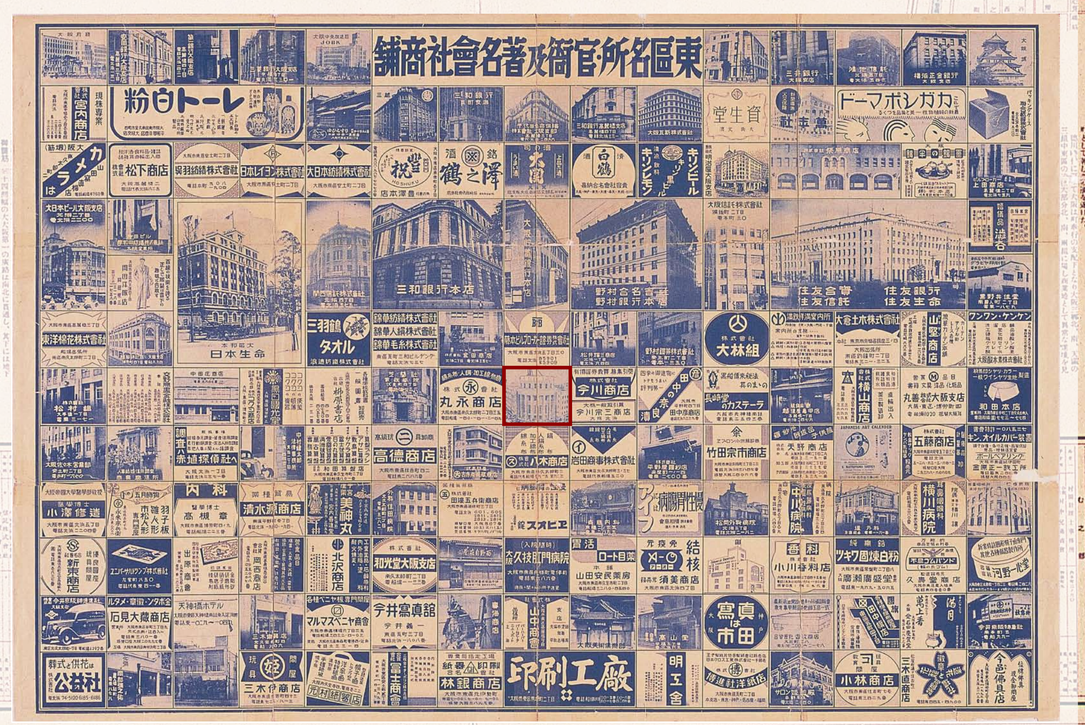
最新の東區

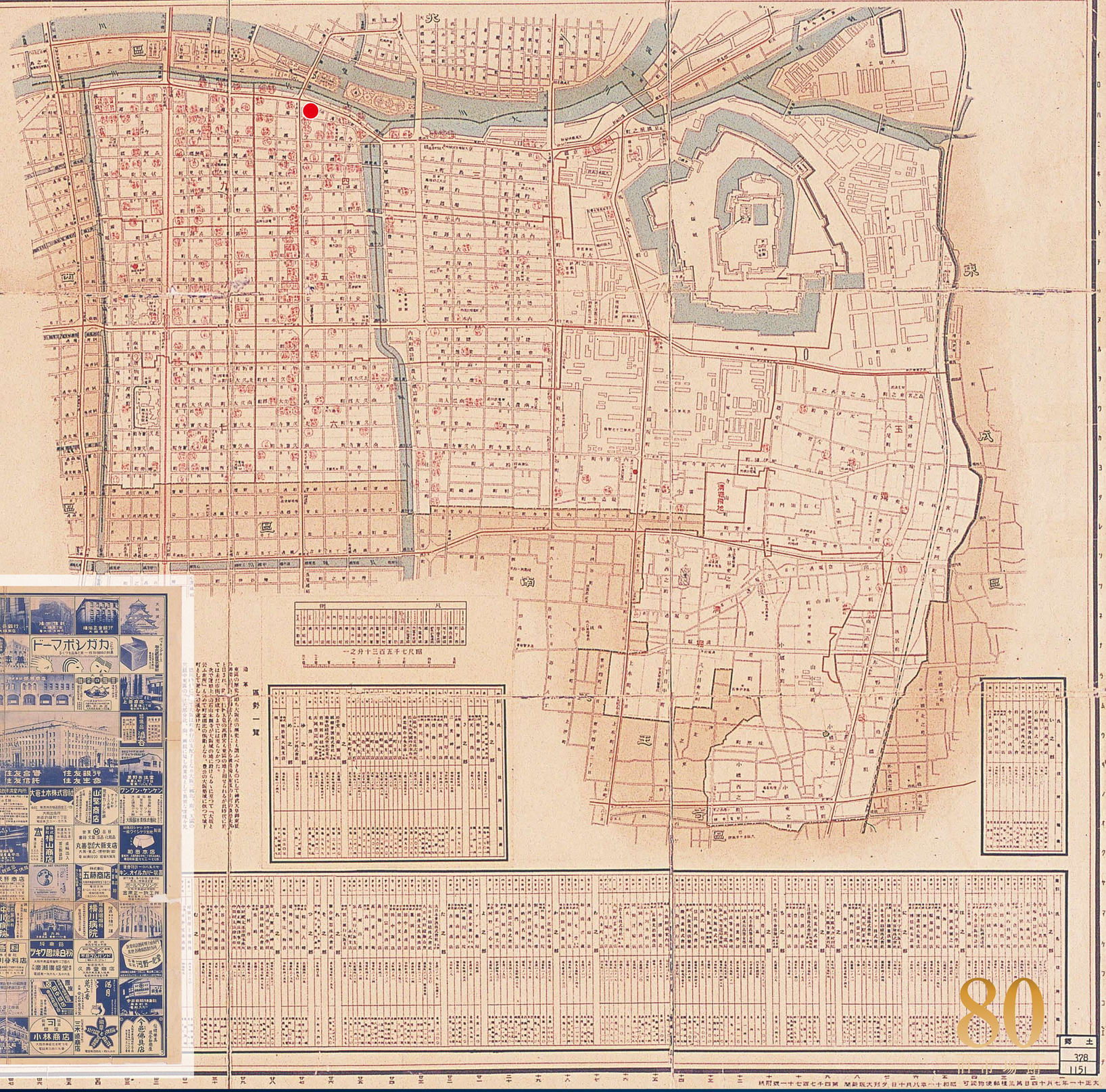
都市計畫路線入

(昭和十一年七月調)

大阪府立
昭和 60.11.29
632364
中之島
図書館







80
寄土
328
1151

大大阪区勢地図(昭和11年7月) 大阪府立中之島図書館 所蔵

市場館で使用されていた貴重な史料をご覧いただけます。

大阪取引所見学施設 OSEギャラリー

見学をご希望の方は、専用エレベータで4階受付へお越しください

見学時間 **9:00～16:30**（最終受付16:00 月曜日～金曜日（祝日を除く））

●施設利用状況により、ご見学いただけない場合がありますのでご了承ください。